

Die Eiche

ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche
Gesellschaft der Präfektur
Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdgc-chiba.com



協会Home Page

新年度を迎えるにあたり

千葉県日独協会会長 金谷 誠一郎-

新年度を迎えるにあたり、まずは会員の皆様からの平素のご支援、ご協力とご鞭撻に心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルスの流行は今年で4年目に入りましたが、残念ながらいまだに、終息には至っておりません。楽しみにしておりました当協会恒例の「ビール祭り」、「忘年会」なども中止、あるいは規模を縮小しての実施を余儀なくされてまいりました。

そのような中で、当協会のメインイベントであります「ドイツ軍人慰霊祭」は、当協会として初めて経験する寒さと雨の中ではありますが、フォン・ゲッツェ駐日大使をお迎えして、粛々と滞りなく無事に挙行することが出来ました。これも一重に、皆様方のご協力、ご支援の賜物であり、心より感謝申し上げます。

また、年度末には3年ぶりとなる対面による「新春講演会」を会員の皆様をはじめとして、関係各位多数のご参加を得まして、好評の内に終了することが出来ました。

此处にこの場をお借りしまして、ご講演いただきました、クラウス・フィーツェ駐日首席公使並びに会場をご提供くださり、多大なるご支援をいただきました麗澤大学の徳永澄憲学長をはじめとする皆様に厚く御礼申し上げますと共に、今後ともご厚誼のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

ところで、当協会の規約には、千葉県日独協会は「千葉県における日独友好親善を図ること」を目的として、次の事業を行う」と謳われております。

1. 日独友好親善のための諸事業
2. ドイツ文化紹介のための講演会、研究・研修会、音楽などの開催
3. 千葉県にちなむ日独交流を深めるための諸活動

当協会は、創設以来、皆様のご尽力により、これら事業の遂行に努めてまいりました。今年度は、一日も早くコロナ禍が収まり、これら事業が再び全面的に展開出来るようになることを祈っております。同時に、「禍転じて福となす」という諺がありますが、対面での行事が思うように実施できない分、オンラインを使つての国内関係団体、さらにはドイツの独日協会をはじめとする友好機関との交流を一層進展させてまいりたいと考えております。

また当協会の特色として、若手会員とシニア会員とが協力し合つて、協会の事業の達成のために、相互に協力しながら会の運営に努めている点があげられるかと存じます。皆様からの積極的なアイデア、忌憚のないご意見を拝聴しながらさらなる協会の発展に向けて全力を傾注してまいり所存です。当協会は設立以来、皆さんが楽しく、和気藹々と、気軽に参加できる会であることをモットーとしてまいりました。今後も、皆様から「会員になってよかった」とおっしゃっていただける会を目指して運営に努めてまいりたいと考えております。本年も、皆様からの一層のご支援、ご協力とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、会員の皆様のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、新年度をむかえるにあつてのご挨拶とさせていただきます。

木戸副会長-新年度の抱負

新年度を迎えるにあつて「会員の一人ひとりが主人公」の千葉県日独協会を目指して

皆様、日頃からたいへんお世話になっております。コロナ禍は、いくぶん収束の気配は見せているものの、まだまだ油断できない状況が続いております。そのなかで、「会員の一人ひとりが主人公」である千葉県日独協会をモットーに、皆様からその実現に向けたご提案、ご助言をいただきながら、誰もが気軽に会の催しに参加できるような会を目指して、微力ではありますが、この1年間努めてまいりたいと存じます。



千葉県日独協会は、日独の文化交流の促進に関心をもった会員から構成されたボランティアの組織です。さまざまなバックグラウンドをもつ、多士済々の方々が会員になっておられます。たとえば、会員の皆様から毎回その豊かな経験談などを話題として提供していただき、会員同士で楽しく、ざつぱらんに語り合えるStammtischのような場を定期的に設けることができないかと考えています。

コロナ禍のなかで、対面による行事は制限されていますが、オンラインを活用した意欲溢れる青壮年部の積極的な活動に、敬意を表しています。年齢、男女にかかわらず、ドイツ語の知識の有無にかかわらず誰もが、分け隔てなく参加でき、くつろぐことができる、「全員が主役」である交流の場を提供できるよう心してまいりたいと思っております。

コロナ禍以前は活発であった、ドイツパンと料理を楽しむ会、ビール会、ワイン会、バス旅行、さらにはドイツ旅行など、一連の楽しい行事が復活できることを祈っています。

皆様、本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

植松事務局長-新年度の抱負

2022年は、コロナの物理的・心理的呪縛からは完全に解放された年とは言えませんが、11月の「ドイツ軍人慰霊祭」、年明け2月の「ドイツ首席公使講演会 & 懇親会」は対面式で開催され、どちらも70名程の参加となりました。これは、コロナ禍でも周到な準備と綿密な対策を講じさえすれば、対面式行事も充分開催可能であることの証左です。他方「運営委員会」、「会報編集委員会」や「青壮年部会」等の会議（打合せ）は、効率を優先し全てリモートにて開催しました。自宅や旅先からでも出席可能で、文書やグラフを画面共有しながら、限られた時間を有効に効率よく使うことができました。さらに青壮年部主催のオンライン講演会や日本語シュタムティッシュは、広く県外や海外からも多数の参加者を得ることができ、対面式では見ることが出来なかった「新しい景色」に遭遇しました。



個人会員の半数を75歳以上が占める今、若手会員の獲得が急務です。また、IT他あらゆる手段を駆使し既存会員が年齢や転居に関係なく継続して会員でいられるような環境整備に全力を注ぎたいと思いますので、引き続き会員の皆様のご協力をよろしくお願いします。

新春講演会・懇親会 出席報告

常任理事 勝見 浩明



2月25日（土曜）、麗澤大学かで校舎 1601号教室にてDr. Klaus Vietze ドイツ大使館首席公使をお招き、今年の新春講演会が行われました。講演会場は、参加者総勢76名の出席者で広い講義室がほぼ埋まっている状況でした。講演のタイトルは、「時代の転換期におけるドイツと日本/Deutschland und Japan in der Zeitenwende」でした。

タイトルを見た瞬間より、両国の転換期とは、どの部分をフォーカスされているのか。非常に興味を持ってこの講義に臨みました。公使は、ドイツにおける歴史的な転換点としてまさしくロシアによるウクライナ侵攻にフォーカスを当てて講演をなさいました。1990年代のソ連崩壊後の緊張緩和が続いたのですが、現在の欧州内におけるウクライナでの戦争状態によって、経済安全保障体制の見直しが急務になったという論点が明確に伝わってきました。最近の世論調査によると、ドイツ国民のウクライナ支援の比率は、現在68%であり、国民の2/3以上がウクライナ支援に対して肯定的な見方をされているそうです。一方、日本は、45%。これに関しては、地政学的な要因であろうとされていました。

ドイツにおける変換点に対する国政レベルで非常に興味を持ったのが、以下の観点でした。とても論理的な考え方で国内政治を推進しているのが理解できました。

●ドイツ政府のスタンスの明確化。これは、ロシアが国連憲章を一方的に破り武力によるウクライナ侵攻を行うことにより、ドイツ政府は、まず、国民の安全を守らなければならないという明確なスタンスの表明

●そのためには、国防予算の引き上げが急務であり、長らく続いた緊張緩和時代には、GDP費に対する国防予算が1%レベル。2%台でも高いという世論があった状況もあったが、今や4%レベルが標榜されている。この国防費についての歴史的な事例としてとても興味深かったのが、Brandt首相の東方外交でした。歴



Dr. Klaus Vietze 公使



講演風景



草本先生より記念品贈呈

史の授業でもポーランドに対する平和外交の推進というイメージが強かったのですが、平和主義の象徴のようではありますが、実は異なるとのこと。当時の国防費は、GDB比率4%台。自国の安全保障のしっかりとした土台があってポーランドと平和外交を推進。

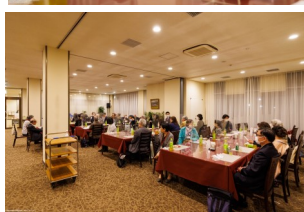
当時のドイツ政府は、東方外交の推進の基盤には、しっかりとした国防体制が確立しており、「強いドイツ」を基盤に外交展開していた。つまり、バランスが取れた交渉であったと公使が解説されていた点です。

一方、将来も隣国であるロシアや中国とも国際関係は継続していく必然性があることから、交渉の難しさはあるものの、バランスの取れた外交戦略が必要であること。

では、国内政治におけるバランスとは何か。その点についても公使は触れておられます。すなわち、連立内閣ドイツは連立政権であり、各政策に対する各党の考えは、異なる部分もあり、激しい議論が活発に行われました。しかし、この活発な議論を通じて今後の方向性が見えつつあるという状況であるそうです。それぞれの考え方の相違を議論しながら、一定の方向性を導く、民主主義の実践の根拠ができていくのだと強く感じました。

2月中旬、ミュンヘンで開催された安全保障委員会における各国の状況も紹介され、興味深かったのですが、その安全保障会議でのアンケートでは、ロシア、中国を目指すべき国とする比率は少なかった。先日、中国の和平提案は、興味深い点がある。それは、ロシアのウクライナ侵攻への非難が全く無いことであるとされました。中国の和平調停が国内向けのメッセージ（中国は、平和主義である）と同時に関係国の一つであるインドとの関係も捉え、中国の国際政治においてもバランスを考慮した国内外の政策が推進されていることも説明くださいました。当然、今回のウクライナ侵攻に対して西側の断固とした毅然とした対応は、中国の外交政策にも影響を与えているであろうとされました。

柏市内の広い大学キャンパス内にある「まんりょう」で講演会に引き続き、草本理事の談話も交えた和気藹々とした懇親会が行われました。麗澤大学の教授でもあられる草本理事は、目下、NHKのテレビドイツ語講座「旅するためのドイツ語」の講師をなさってられますが、番組制作を通じて体験なされたこと、麗澤大学におけるドイツ語教育方針を紹介され、語学の習得には、文法ありきではなく、ドイツ本国に多くの学生を送り、その場に相応しい表現できるところに注目しているということも紹介され、麗澤大学におけるドイツ語教育の方針も紹介されました。懇親会の参加者からは、活発な質問もなされ、和やかな懇親会となりました。同時にここ数年オンライン中心で忘れかけていたFace to Faceでの会合ならではの魅力も感じる事ができました。



和やかな懇親会の様子



「境界地域BORDERLAND」として のエルザス＝ロートリンゲン講演

～文化・言語・住民の移り変わり～

青壮年部ドイツ歴史研究会の活動の一環として神戸大学大学院国際文化学研究科 衣笠 太郎講師（当協会会員）による標題のオンライン講演会を昨年12月10日実施しました。尚、本講演は、ドイツ大使館文化事業助成プログラムでした。協会内外から総勢、約60名の方が講演にエントリーされました。

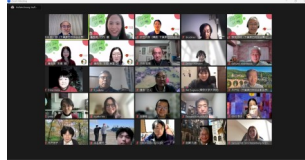
衣笠先生には、一昨年開催した、「近現代の旧ドイツ領と日本」の講演の続編となりますが、一昨年のフォーカス領域は、シュレージエンでした。今回は、エルザス＝ロートリンゲンを取り上げていただきました。双方のテーマに共通しているのは、対象となる領域の歴史を「国民史」すなわち、その領域が属する国家で捉えるのではなく、境界地域＝BORDERLANDとしてそこに住む住民層の言語、宗教などの帰属意識を捉える点にありました。

これまで幾度となく、帰属する国家がドイツ、フランスに移り変わったエルザス＝ロートリンゲンの住民層の帰属意識はどのように捉えられるのか、個人的にも非常に関心を持っていました。歴史的な経緯から言うと、中世は、神聖ローマ帝国に帰属した地域だったそうですが、17世紀中葉に終わった30年戦争後に大部分がフランス領、その後、19世紀後半の普仏戦争後にドイツ帝国へ編入、第一次大戦後にフランス領、第二次大戦下では、ドイツ支配下という帰属経緯となります。

私は、これまでアルザス地方の言語特性（ドイツ語方言）、ドイツ風の建築様式から、住民意識の基本は、ドイツ寄りかと思っていましたが、衣笠先生の講義によって一口にエルザス＝ロレーヌと言ってもそれぞれの言語には、違いがあり、異なった歴史的な発展経緯を持った住民で構成されている点、ドイツ帝国支配下においてこの地区の住民層は、ドイツ本国からの支配、具体的にはビスマルクによるドイツ化政策に対して反抗心を持っていて自治を求める意識に発展（ドイツでもフランスでもない、アルザスをアルザス人へ）があらたな知見として有意義でした。

講演内容としては、歴史的な事実関係のみを語るのではなく、多くの画像でエルザス＝ロートリンゲン地方を紹介くださったり、この地方出身の有名人を紹介されたりしてこの地方の特色が楽しく把握できる説明をなされておられました。

講演会終了後、12項目にわたる意見、感想が寄せられ、BORDERLANDとしてのエルザス＝ロレーヌ地方の捉え方が新鮮であり、とても有意義内容であったという感想で占められていたのが印象的でした。（常任理事：勝見 浩明）

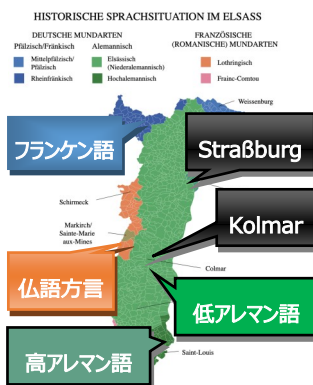


オンライン講演の様子

本日の内容

- 1. 旧ドイツ領と境界地域
- 2. エルザス＝ロートリンゲンの概略
- 3. エルザス＝ロートリンゲンの言語と文化
- 4. ドイツ領時代のエルザス＝ロートリンゲン
- 5. 第一次世界大戦後の国境変動と住民
- 6. その後のアルザスとロレーヌ

講演内容（説明資料引用）



19世紀アルザス地方の言語分布

Die Eiche No.121記事より転用

*Wikipedia "Alemannische Dialekte" 説明より引用、追記

1990年代ドイツのリアル



ドイツと私

ドイツと私 - 神田 基成 -

1979年生まれの私にとって、幼少期に「ドイツ」と言ったときには多くの場合「西ドイツ」を指していました。したがって、「東ドイツ」が日常会話に出てくることはほとんどありませんでした。そんな私にとってのドイツとの関わりは、1980年代の小学生時代に始まりました。

転勤族だった父についてまわり、私たち家族はオランダで5年間生活しました。1986年、日本人学校小学1年生で始めたサッカーのスパイクには「Made in West Germany」の文字。子どもながらに、冷戦下における東西の分断は普通のことと受け入れていて、西ドイツについては「自動車からスパイクまで、モノづくりがさかんな国なんだ」と感じていました。

統一後のドイツ連邦共和国においては、1990年代に入ると日本の私立学校法人が中学校・高等学校を設置していました。バーデン・ヴュルテンベルク州政府が日本企業を誘致するため、神奈川県私立桐蔭学園と提携し、1992年ドイツ桐蔭学園（Toin Gakuen Schule Deutschland）が設立されました。1995年、その高等部に入學した私にとって、伝統あるれんが造りの学生寮とモダンなデザインの授業棟とを行き来する毎日は、南ドイツの自然や文化と調和した穏やかながら、吸収することが多い生活でした。（高校生にとっては刺激が少なく、頻繁に市街地にも繰り出していましたが・・・）



ドイツ桐蔭学園の校舎全景

学校が置かれたバート・ザウルガウ市は、地方都市ながらトルコ人移民（Gastarbeiter）も多く、その2世たちとは、所属したサッカークラブで技を競い合ったものでした。マイスターによって厳しく管理された天然芝のグラウンド、公式戦用のスタジアムを擁し、クラブハウスでは年長者チームの選手が週末に集ってはビールジョッキをあける様子が見られ、生活の一部、いや大部分となっているドイツのサッカー文化をまざまざと見せつけられたようでした。当時の日本は、まだJリーグ発足から数年しか経っておらず、熱狂だけで突っ走っていたようにみえ、ドイツのサッカー環境はなおさら成熟して見えたのでした。

こうして振り返ってみると、私の高校生活は意外にも統一後の現代ドイツの諸事象が色濃く反映されていたことに気づかされます。ヨーロッパ工業の中心たるドイツ、出稼ぎ外国人労働者を抱えるドイツ、サッカーが盛んなドイツ、といった様々な場面に身を置いていたのです。また資源リサイクルなども進んでおり、環境に配慮する生活は、今でも強く印象に残っています。

ドイツで高校1・2年を過ごした私は、3年進級時に横浜の桐蔭学園に「留学」という形で帰国しました。以来、ドイツ時代をともに過ごした級友とは、「Danke!」「Bitte!」が今でも日常語であり、別れ際に再会を約してこう叫ぶのです。「Tschüß!」

新入会員紹介（小林 多美子）

皆様、初めまして。22年11月に新たに入会させていただいた小林多美子と申します。

私は22年3月まで毎日新聞船橋支局に勤務し、船橋市や習志野市を担当しておりました。そこで、習志野原のドイツ兵捕虜収容所や習志野霊園の慰霊碑、慰霊祭について取材しましたのがドイツならび千葉県日独協会さんとのご縁です。現在は東京本社地方部という部署にいますが、千葉県在住で、習志野原の取材は続けています。せっかくのご縁をありがたく思いまして、入会させていただきました。

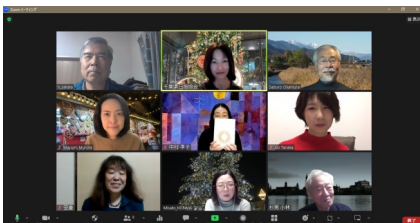
協会の皆様が翻訳された「エーリッヒ・カウルの日記」「祖父ユリウスの体験1913～1920」を記事で紹介したり、取材の参考にしたりしました。読むにつれて、ドイツや当時の習志野原についてとても身近に感じ、「生の声」の重要さを改めて感じました。「他者を想い、身近に感じる」ということは、報道にも国際交流にも通じることではないかと思えます。これからどうぞよろしくお願いいたします。



オンラインドイツ語講習会

～岡村 三郎先生からのメッセージ～

協会恒例のドイツ語講習会は、当協会理事 早稲田大学名誉教授岡村三郎先生を講師にお迎えし、昨年10月から12月にかけてオンライン式で7回行われ、Reiner Kunze 著



受講者集合写真

Der Löwe Leopold を精読しました。岡村先生の授業は毎回好評を博し、リピーターを含む6名の受講生の方（会員5、非会員1）が参加されました。

講習会に寄せて岡村先生からコメントをいただきました：

私はこの講習会を、ドイツ語をもう少し続けてみたいという要望に応えられるようなクラスにしたいと思いました。人数は多くはないけれど、とってもしっかり参加者の皆さんに恵まれ、私にとっては楽しい時間でした。ここでは比較的易しい物語を読みます。文法的、また語用の問題点を丁寧に見ていくのはもちろんですが、私が重視したのは話の前後のつながりを的確につかむことです。そのために、例えば代名詞が何を指しているか、さらには文と文、パラグラフとパラグラフとの関係を示す接続詞や副詞に焦点を当てて読んできました。テキストとしてはReiner Kunzeの作品を使うことが多かったのですが(2022年度はDer Löwe Leopoldを読みました)、それは何よりもまずKunzeのドイツ語が的確で無駄がなく、内容的にも各作品が筋の通った倫理観に裏打ちされ、共感できるという点が決定的です。参加者の皆さんにもこの点は納得していただけたのではないのでしょうか。(理事：岡村 三郎)

活動報告

オンライン食文化講演会

〈オーストリアからマールツァイト〉

当協会4回目の協力となる日独文化協会主催第6回オーストリア食文化講演会〈オーストリアからマールツァイト〉が11月27日（土）東京・赤坂にあるドイツ文化会館1階のドイツ・オーストリア料理レストラン「Mahlzeit」（マールツァイト）から中継で行われました。今回はオンラインに加えて現地参加も実現しました。申し込みは30名（7名が現地参加）、当協会からは3名が参加されました。参加者オプションのお料理には70食の注文がありました。



今回のテーマは新酒の季節11月にちなみ「ウィーンのホイリゲとは」でした。ホイリゲHeurigeとはその年の新酒を飲ませる居酒屋のことです。日本・オーストリア食文化協会会長飯田章氏による講演は、ウィーンのホイリゲの特徴や歴史が豊富な映像と詳しいお話によって繰り広げられました。また、既に始まっていた現地のクリスマスマーケットの様子も紹介され、大いに旅情がそられました。

講演に続いて、厨房から山口雅鷹シェフによる料理教室が行われました。メニューは「新酒ホイリゲに合ったウィーン料理」（ウィーン風リブタウワー、シュタイアーマルク風ポーク肩ロースのシュベッツエ添え、シュトレン）でした。

最後は、飯田氏と山口氏と参加者による和やかな会話で盛り上がり収録が終わりました。その後、現地参加者は作り立てのお料理と参加者同士の交流を楽しみました。（常任理事：土屋 有里）

訃報

永池 克明理事

12月18日、ご逝去されました。享年79歳。習志野第九合唱団員の活動としてドイツ軍人慰霊祭で歌唱としても参加されました。



今後の予定

- 理事会（書面決議）
- 総会 日時：2023年5月14日 15:00-
場所：船橋中央公民館 音楽室
● 詳細は、別途、ご案内致します。

会員情報

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、
(株) 京葉ビル管理、(株) 和幸電気工事

編集後記

何年ぶりに実現した対面式の新春講演会・懇親会でしたが、人と実際に接することの有意義な点を感じることができました。また、Dr. Klaus Vietze 首席公使による新春講演会の内容が時宜を得た欧州国際情勢、またこれまでの欧州外交のスタンスを改めて聞くことができとても示唆に富む内容で充実していたと思いました。懇親会では、これまでオンラインでの接点のみでしたが、草本先生のお人柄も触れることができ、会員の皆様との交流も非常に楽しく和やかな雰囲気をご堪能させていただきました。（勝見 浩明）